

筑波大

サハラ周辺で植林

遺伝子組み換えユーカリ開発 現地調査へ

筑波大（つくば市天王台）が急速に砂漠化が進むアフリカの緑化支援に乗り出す。アフリカ開発銀行が北部のサハラ砂漠周辺で検討する緑化プロジェクトに、同大が協力。遺伝子組み換えユーカリを開発して現地調査などを行う。



遺伝子組み換えユーカリについて説明する渡辺和男教授（左）とつくば市天王台の筑波大

これまで植物が育たなかった砂漠や半乾燥地域で植林が可能になれば、二酸化炭素削減効果も期待される。イタリヤで開催された主要国（G8）財務相会合で去る13日、与謝野馨財務相が、同大の耐乾性・耐塩性ユーカリ栽培による研究成果をもとに、アフリカの緑化に向けた支援を

行う考えを表明。2008年10月、アフリカ開発銀行総裁が同大を視察した際、ユーカリの遺伝子組み換え研究に興味を持ち、今年5月の同銀行の年次総会で「アフリカでの植林事業に日本の支援を得たい」と政府に申し入れていた。

同大生命環境科学研究科の渡辺和男教授らが開発したユーカリは、乾燥や塩などの環境ストレスに適応できるように遺伝子を組み換えた。今後2年間行われるサハラ砂漠周辺の植林地の選定や実現可能性の調査に協力。同大が留学生受け入れ

などで植林技術者の人材育成も進め、年に約6万平方メートルの砂漠化が進むアフリカの緑化に貢献する。渡辺教授は「木が育たない場所で、植林が実現すれば二酸化炭素削減にもつながる」と意欲を示している。（北別府由美）